

キリスト者家庭から 神の国を広めるために

エフェソ5章21～33節
2022年10月16日
松田 基子 師

イエス様は人類の神様に対する罪を、神の御子の体をもって十字架で贖い、人類を罪による永遠の滅びから救うために、人の子となってこの世に生まれて来られました。そこで、イエス様が御自身による福音を語りだされた第一声は、マルコ福音書1章15節の、

「時は満ち、神の国は近づいた。

悔い改めて福音を信じなさい」

でした。イエス様の使命、それは人類の救いでしたが、そこにはどの様な意味があったのでしょうか。

人間は神様が、人類への愛を込めて創造し、託された世界を罪で汚し、罪の蔓延する闇の世界にしてしまいました。イエス様はそこに神様の光となって来て下さいました。人類に救いの道を拓き、**神の国を回復させる**ためにこの世に来られました。ところでイエス様は十字架の贖いを成し終えると復活し、天という言葉で表現される永遠の世界に戻られました。そして神様の権威執行者として、神の右の座に着かれました。では、イエス様が天に帰られて、地上の神の国への回復はどうなるのでしょうか。

神様はその為に、イエス様と入れ替わりに、聖霊を弟子達の群れに送られ、その弟子達の群れを教会とされました。神の国の福音は教会に託されました。そうすると、イエスさまとの関係は切れてしまったのでしょうか。

いいえ、聖霊によって更に深い関係に結ばれました。イエス・キリストは頭、教会はその体の関係に入り、一体としての関係になりました。イエス様が教会を愛して下さる愛は、御自身の体として愛して下さっています。では、教会はイエス様の愛に浸って、温々として、自分達の幸

せだけを喜び合っていれば良いのでしょうか。いいえ、イエス様が頭で、教会は体なのですから、教会は頭である、イエス様のご意志を体として具体的に動いて働かなければなりません。その使命は、イエス様の使命である、神の国の回復のためにイエス様の手足となって働くことです。その為には神の国に属する生き方を求めて成長し、イエス・キリストの福音を語って行かなければなりません。

パウロはエフェソ地方の諸教会の信徒さん達に、その事を求めて手紙を書き送りました。キリスト者として、先ず知るべきことは、神様の一方的な驚くべき恵によって、自分たちにもイエス・キリストの御救いが与えられた事です。そして、その恵みに答えて、キリスト者に相応しい生き方を身に着けることです。パウロはエフェソ書3章17節で、

「信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように」

と勧め、4章2節では、

「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい」

と命じています。

そして4章16節には、

「キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わせられ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです」

とキリストに結ばれて成長して行く姿を示しています。その根拠は、5章1節の、

「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣うものとなりなさい」

にあります。

神様に愛されている、それは具体的にはイエス様の十字架であり、イエス様御自身の愛です。

イエス様の愛を思う時、わたし達はその愛の深さが分かれば解る程、その愛に答えたいとの思いで、イエス様を愛さずにはられません。でも、天に帰られたイエス様を愛するとは、具体的にはどう言うことなのでしょう。

イエス様は、マタイ福音書25章40節で、
「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」

と言われました。それは自分の具体的な生活の中で接する人々に対して、

『愛をもって応答して行く』
と言うことです。

ところで私達の本性、自我が最も現れるところは何処でしょうか。それは家庭であり、自我のぶつかり合いが最も激しいのは、夫婦です。キリスト者の家庭が、先ず神の国にならなければ、地上に神の国が広がっては行きません。自我が最もぶつかり合う夫婦においてこそ、キリストに仕えることを学び、訓練され、真にキリストに仕える者に成長して行くことが求められています。

そこで、エフェソ書5章21節に、夫婦としての大前提が記されています。それは、

「キリストに対する畏れをもって、
互いに仕え合いなさい」

です。畏れは畏敬(いけい)の畏(い)です。夫婦と言うのは近すぎて自我が丸出しになってしまい、互いの自己主張のぶつかり合いが起こるものです。ですから、二人の間に、イエス・キリストに入っていたいただかなければなりません。さて、22節には、

「妻たちよ、主に仕えるように、
自分の夫に仕えなさい」

とあります。世の夫たる方々は、この言葉を聞いてとても良い気分になられると思います。

反対に妻達は、
『どうしてこんな不平等な事が聖書に書いてあるのだろうか。時代に合わない』
と思われるでしょう。しかし、

ここで使われている

『仕える』

と言う意味は、

『神様の秩序、指令の下に、共に立つ』

と言う意味です。詳訳聖書には、

「妻である人々よ、あなた方は主への奉仕のようにして、自分の夫に服しなさい。従う態度を持ち、自分を合わせて行きなさい」

と訳されていて、それは決して強制されるものではなく、自発性から出たものでなければなりません。目的は家庭を神の国にするためです。

妻も夫も双方、

『自分が主導権を握りたい。

私の言う通りにして欲しい』

と思っている間は、家庭は神の国にはなりません。自分が主導権を握りたいと思っている妻にとって、23節の言葉は一層受け入れ難いものになります。

23節には、

「キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭(かしら)だからです」

とあります。わたし達は、頭と体とに分けて考えると、頭の方が上位という主従関係に受け取ってしまいがちです。夫婦は主従関係になつてはなりません。ここでの強調点は、

『頭と体は一体で、切り離す事が出来ない、緊密な関係にある』

と言う事を言っているのです。頭なくして体なく、体なくして頭はなく。分離不可能と言う意味です。その関係は、愛の自発性です。

そこで24節には、

「また、教会がキリストに仕えるように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです」

と勧められています。ここで、自分は

『イエス・キリストの身体の一部として、
イエス様から教会に招き入れられ、
その働きの一つを委ねられている』

と言う立場に立つなら、イエス様に対しては喜んで、心から出来る事をせずにはおれなくなるものですが、相手が夫となると、それができません。

では、夫達はどうかでしょうか。25節に、
「夫たちよ、キリストが教会を愛し、
教会のために御自身をお与えになった
ように、妻を愛しなさい」

と命じられています。イエス・キリストが教会を愛された愛は、それは御自身の命を人類の罪の贖いのために、十字架の苦しみを厭いとわず、差しだしてお与えになりました。それも、御自身に敵対する者をも、何の区別もなく愛して、御自身をお与えになりました。

先ず、問いたいのは、

『夫達に、その様な愛があるか』
ということです。パウロは夫達に、その様な愛が無い事を承知で、

『その様な愛で妻を愛しなさい』
と命じています。なぜなら、目標が分かれば、人はそれに向かって歩き始める事ができるからです。

26節から、その目標が示されています。
「キリストがそうなさったのは、言葉を伴う
水の洗いによって、教会を清めて
聖なるものとし」

とあります。詳訳聖書では、

「キリストの目的は、御言葉をもってなされる
水の洗いによって、教会を清めてこれを聖なる
者とする事にある」

と訳されています。イエス様の願いは、信仰共同体の最小単位である夫婦が、キリストを信じて、心から変えられ、家庭を神の国に成す事です。その為に、イエス様は何をなさったのでしょうか。パウロは2人(夫婦)の共通所属である、教会とイエス様のとの関係に焦点を当てています。

イエス・キリストが十字架に架かってまで、御自身をお与えになったのは、

『イエス・キリストを信じる人々によって、
ご自身の体なる教会を建てあげ、清めて、
教会を神の国のひな型とする』

ことでした。教会はどの様にして清められるのでしょうか。水の洗いである洗礼を受け、神の

言葉によって清められ続けるのです。

その目的は27節に、

「しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした。」

それは純白の花嫁の姿です。イエス様は、御自身を信じる教会を、御自身の花嫁とされました。イエス様に結ばれるまでは、この世の勢力に結ばれて、罪と汚れ、罪の染みやしわや、その類いのもので、真っ黒に汚れていました。最早人間の努力ではどうにも変えられない、罪の心を持っていました。そんな人間が、キリストを信じて結ばれたことによって、イエス様は人の力では清められない罪のしみやしわや、その類いのものの全てを、神の御子の十字架の血によって洗い清め続けて下さっているのです。

その様にして、やがての日には聖なる汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせられるのです。ヨハネの黙示録19章7節に、

「わたしたちは喜び、大いに喜び、神の栄光をたたえよう。小羊の婚礼の日が来て、花嫁は用意を調えた。花嫁は、輝く清い麻の衣を着せられた。この麻の衣とは、聖なる者たちの正しい行いである」

とあります。イエス様はこの地上に於いても、天上に於いても、御自身を信じる教会を、御自身の体として、また花嫁として、どれ程愛して下さっているのか、それは言葉で言い表すことが出来ません。

28節には、

「そのように夫も、自分の体のように
妻を愛さなくてはなりません」

と命じられています。キリストの愛に倣い、頭なるキリストが、体である教会を愛されたように、自分の体として、愛し労り、大事にする事が命じられています。

「妻を愛する人は、自分自身を
愛しているのです」

とあります。

イエス様は、

『自分を愛するようにあなたの隣人を
愛しなさい』

と言われましたが、人は誰も神様による愛の充足があって初めて、自分を愛し、隣人を愛せるものです。ですから、妻を愛せている人は、自分自身イエス様からの愛の充足があるということなのです。

29節には、

「わが身を憎んだ者は一人もおらず、
かえって、キリストが教会になさったように、
わが身を養い、いたわるものです」

とあります。わたし達は罪に汚れ、失敗を繰り返す自分に失望して、

『自分を捨ててしまいたい』

と言う気持ちに襲われる時がありますが、それでも憎み切って捨ててしまう事は出来ないのです。自分を叩いてばかりいては、何も良いものは生まれません。それは何よりも、わたし達の造り主である神様を悲しませることです。キリストは七を七十倍するまで、つまり、何処までも悔い改める者を赦し続け、洗い続け、清め続けてくださっています。そのイエス様の愛に信頼して、イエス様を見上げて我が身を養い、労って行きたいものです。

何よりもわたし達は主を信じ、主のものとなり、キリストの体の一部とされています。その恵は限りなく大きなものです。夫も妻も、そこに土台を置いて、人は父と母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となるのです。神様は夫婦の秩序をお与えになりますが、それは神様の前に仕え合う真実の愛を築く為でした。

しかし、人類の最初の夫婦モデルであるアダムとエバは、罪を犯して、真実の愛を築くことは出来なくなりました。創世記の3章16節で、罪を犯した妻に向かって神様は

「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。
お前は、苦しんで子を産む。お前は男を
求め彼はお前を支配する」

と言われ、夫アダムに向かっては、17節から、

「お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。おまえは顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵に過ぎないお前は塵に返る」

と言われました。

この様に人間の夫婦は罪によって、その関係が壊れてしまいました。イエス様はその関係を回復させるために、先ず御自身を信じる人々を主の体なる教会に連ならせ、その教会を御自身の花嫁となさって、教会を愛することによって夫婦の或るべき愛の姿を示されました。

パウロは、神様が定められた夫婦の秩序と祝福について、

「この神秘は偉大です」

と言っていますが、彼の本意は、その関係を回復するために、キリストが教会を御自身の体であり、花嫁として愛された、その偉大さを示しているのです。わたし達もイエス様から、その愛を受けている者です。キリスト者の夫婦ばかりでなく、皆キリストの花嫁とされています。イエス様のその尊い愛に答えて家族に仕え、先ず家庭から神の国を広げて行こうではありませんか。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

わたし達をキリストの体なる教会に連ならせて下さり、主の花嫁として下さった事を感謝します。キリスト者夫婦も、そうでない者もイエス様の愛に答え、家族に仕え、隣人に仕え、神の国を広げて行くものと成らせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン